

平成19年度 工芸科学部 学位記授与式
学長告辞

本日、ここに学士の称号を得て卒業を迎えられた皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで長い間にわたって皆さんの勉学を支えてこられたご家族および関係者の方々のご労苦に対して深い敬意を表します。

皆さんは、本学での学部教育課程で研鑽を積み、輝かしい成果を挙げ、本日目出度く卒業式を迎えられました。本日は、皆さんが過ごしてきた大学生活を振り返る日であると思います。自らが興味を持った専門について深く学び、友人、先輩、後輩と思い出深い時を過ごし、そして、多くの先生から指導を受けたことなど、本学での学生生活をじっくり吟味するのは、今日において他にはありません。また、皆さんは、それぞれがご家族をはじめ多くの人々のご支援によって今日を迎えることが出来たことと思います。今日は、そのご恩を改めて振り返り、感謝する日でもあります。

皆さんは、本学で得た知識と経験を糧に、明日から新しい世界へ船出されることとなります。そして、企業での業務、あるいはもの作り、また大学院での研究等、様々な仕事に従事され、社会的自己実現を果たされることとなります。小学校から大学までの教育は、この社会的自己実現に向けての準備であったわけです。この意味で、本日の卒業は、皆さんの人生の中でも大きな節目となる出来事であります。

皆さんを待ち受ける現在の社会の状況は、決して明るいものばかりではありません。環境破壊、気候変動・地球温暖化、宗教的対立、貧富の格差、少子高齢化、年金問題、生命を脅かすような様々な偽装問題、ワーキングプアなど、課題山積の社会の中で、多くの人々が漠然とした不安をかかえながら、日々の活動を行っています。

このような社会に船出される皆さんは、今まで経験したことがないような困難な課題に遭遇されることになると思います。激しく変化する社会の中でどのように生きてゆくか、困難な課題に遭遇したときどのように身を処するかは重大な課題であります。特に若い人にとっては、重大です。そこで、今日は、このことについて、皆さんに一言申し上げたいと思います。

社会で仕事をしながら生きて行くとき、必ず遭遇するのが成功と失敗であります。現代社会では、とくに評価ということが重視されており、個々の結果に対して成功

か失敗かということが社会的に評価されます。したがって、人は皆、仕事を為す上で必ず成功か失敗のいずれかに直面しなければなりません。しかし、生きて行くうえで重要なことは、成功・失敗そのものよりも、それらをどのように受け止めるかということであり、その体験をいかに次に活かすことができるかということであり、ます。

漠然とした不安の中で重要な仕事をしなければならないとき、人は「自己ハンディ化方略」という一見奇妙な行動をする場合があります。例えば、翌日に大事な仕事や試験が控えているのに、ゲームをしたり、カラオケに行き遅くまで友達と遊んだり、飲みにいったりし、睡眠不足状態になるような行動をすることがあります。皆さんは試験の前にこのような行動をしたことはありませんか。多分、多くの方がこれに類する行動を一度はした経験があるのではないかと思います。困難なときに自らを苦況に陥れるような行動が自己ハンディ化方略と言われる行動です。このような行動は一見矛盾したもののように思えますが、多くの人がしばしばこのような行動をします。人は、何故このような行動をしますのでしょうか。人は、何故わざわざ失敗の可能性が高い道を選ぶことがあるのでしょうか。

言い訳や正当化は、自己の望ましくない面を否定したり、自分を望ましい人物に見せかけるための重要な手段と考えられます。例えば、睡眠不足や病気は試験に失敗したときの絶好の言い訳になります。このことを利用して、人は、成功するかどうか不安な時には、あらかじめ失敗の言い訳となるような障害を自ら作り出しておき、失敗したときの備えをする傾向があるのです。すなわち、自分にハンディを課しておき、もし失敗したら、失敗の原因をそのハンディに帰することができるような状況を作っておこうとするのです。逆に、もし成功したら、成功の原因は自分の能力の高さによるものと主張できると考えるのです。これによって、望ましい自己像を守ろうとするのです。このような行動は、ある一面からは極めて理性的な行動であります。

社会心理学者のバーグラスとジョーンズは、30年前に、人が自己ハンディ化方略をとるのはどのような時かを心理実験によって明らかにしています。実験には50数人の男子大学生が参加しました。参加者に対しては、実験の目的は、薬を飲む前後の知能検査の結果を比較し、薬が知的作業に及ぼす効果を調べることでであると説明されました。まず被験者は、第1の課題として、多肢選択式の数列課題に取り組みました。このとき、半分の被験者には解答可能な問題が与えられましたが、残りの被験者には正答がない解答不可能な問題が与えられたのです。この課題が終わった後、それぞれのグループの半数の被験者には、正解、不正解に関らず、「20

問中 16 問正答であった」とのフィードバックがなされ、「非常に優秀な成績である」と知らされました。他の半数の被験者には、検査の結果について何も知らされませんでした。

第 1 課題の終了後、実験者は、2 種類の薬物アクタビルとパンドクリンについて被験者に説明しました。その際、実験者は医学的資料を示しながら、アクタビルは知的作業を促進し、パンドクリンはそれを妨害することを強調しました。そこで被験者は、第 2 の課題に移る前に、どちらかの薬を選んで飲むように求められました。このときどちらの薬を選択するかを調べるのがこの実験の本当の目的でした。

実験の結果、薬の選択に関し、4 つのグループのうち 1 つのグループだけが特異的な特性を示しました。それは、解答不可能な問題を与えられ、しかも、実際には正解をしていないにも関わらず「20 問中 16 問正答なので優秀である」というフィードバックを与えられたグループです。このグループでは、他のグループに比べて、知的作業を妨害すると説明された薬を選んだ被験者が多かったのです。このグループの被験者は、自分の能力による課題解決が困難で不確実であると考え、知的作業を妨害すると説明された薬を選ぶことによって、失敗に遭遇しても、望ましい自己像、プライドを守ろうとしたと考えられます。

この実験が示唆することは、人は、成功したものの、それが自分の能力によるものかがはっきりせず、将来も同じように成功するかどうか危ぶまれるときに、失敗しても自己の能力の評価を下げることなく曖昧にしておけるという点で、自己ハンディ化方略をとることがあるということです。この方略をとる人々は、必ずしも失敗ばかりを経験してきたわけではなく、また、決して自己の能力について否定的ではないのですが、その評価が非常に不安定であるために、将来にわたって成功を維持できないのではないかという恐れのためにこのような行動をとるのです。自己ハンディ化方略は、単に問題が難しく失敗しそうだというだけで利用されるのではなく、過去の曖昧な成功体験から形成された望ましい自己像を幻滅から守るために工夫された、窮余の策と考えられるのです。

今日卒業される皆さんは、これからは、より責任の重い専門的な仕事や研究に従事されることとなります。そして、様々な成功や失敗に遭遇され、それに伴って、賞賛や厳しい批判を受けることになると思います。このような皆さんに申し上げたいことは、生きて行くうえで重要なのは、成功・失敗そのものよりも、それらをどのように受け止め、その体験を冷静に分析、評価し、その結果をどのように次に活かすかということです。

失敗については、「失敗は成功の母」ということわざにあるように、そこから学

ぶことが多く、過去の失敗が糧になって次の成功に繋がることは言を俟ちません。しかし、成功については、残念ながら、その喜びに浸ることはあっても、何故成功したのかを冷静に分析、評価することは少ないものです。

戦国大名、武田信玄は「合戦での勝ち方は、五分を上とし、七分を中として十分は下である。それは、五分勝てば励みを生じ、七分の勝ちは怠りを生じ、十分の勝ちに驕りを生ずるからである」としていた、と伝えられています。

成功したときも、失敗したときと同じように、いやそれ以上に、その根拠について、分析、評価し、その結果をさらに次のステージに活かしていただきたいと思えます。

皆さんは、明日から新たな世界で活躍されることになりましたが、皆さん一人一人が、今まで培ってきた能力のさらなる向上と創造性の涵養に努められ、新しい希望に満ちた社会の実現のために貢献されることを願って、私のお祝いの言葉と致します。

本日は、学士の取得、まことにおめでとうございます。

平成20年3月25日
京都工芸繊維大学長
江島義道